子馬の引き方

日本中央競馬会　日高育成牧場　専門役　冨成　雅尚

「日本と比較して海外の馬は大人しい」、よく耳にする言葉ですが、これは事実でしょうか？答えは「No」だと思います。世界有数の馬産国アイルランドにおいては、多くの馬が大人しいのは事実かもしれませんが、取扱いに苦労する馬もいないわけではありません。そのような例外の原因として、生まれ持った気性もあるかもしれませんが、多くは生まれてから手をかけられることなく、年中放牧されていた馬でした。

では、どのように手をかければ、「大人しい」すなわち人に対して従順な馬に育て上げることができるのでしょうか？その答えは簡単ではありませんが、生後から継続的に実施する「引き馬」が、良いトレーニング方法の一つといえます。そこで本稿においては、アイルランドでの子馬の取扱い方を紹介しながら、「引き馬」についてのお話をしたいと思います。

生後直後の引き馬

アイルランドにおいては、生後から母子を１人で引く方法が用いられています。とはいえ、生後直後の子馬は自ら前進しないため、もう１名が後方からサポートして前進を促します（図１）。これを毎日継続的に実施することで、子馬の肩の左側に人間がいる「引き馬の位置関係」を覚えさせるとともに、人馬の信頼関係を構築することができるのです。

その後も基本的には、子馬の保持にはリードを使用せずに、「両手で抱える」「頚もしくは肩の外側に手をかける」「人差し指と中指を頭絡の鼻革にかける（トゥーフィンガー）」などの方法を用います（図２－４）。リードを使用しない理由は、生後間もない子馬の頚部に対するダメージが危惧されるためです。アイルランドでも、牧場によってはリードを使用していますが、その場合であっても、目的は「リードに対する馴致」であって、決して馬を保持するために使用しているわけではありま

図１　生後直後の母子の引き馬
（アイルランド　キルダンガン・スタッド）

図２　両手で抱える

図３　頚もしくは肩の外側に手をかける

図４　人差し指と中指を頭絡の鼻革にかける（トゥーフィンガー）

せん（図5）。

図5　生後直後のリード使用の目的は馴致
（強く保持することはない）

子馬自身のバランスで歩く

子馬を引く場合に重要なことは、「人の指示に従って歩くこと」「子馬自身のバランスで歩くこと」の2点です。前者は容易に理解できるかと思いますが、後者「自身のバランス」とは何を意味するのでしょうか？これは、子馬が歩く際に「引っ張られたり、押されたりしない」状態であり、人間の指示に従ったうえで、馬自らの意思を持って歩くということです。わかり易く、人間の子供に例えれば、「親に言われて嫌々、勉強・お手伝いをする」のではなく、「子供が自らすすんで、勉強・お手伝いをする」といったイメージでしょうか？ただし、人間の子供と異なり、「勉強をして希望の学校に入る」「お手伝いをしてお小遣いをもらう」といったモチベーションを馬は持っていません。そこで、馬に対しては、「オンとオフ」を用います。馬が前に歩き出すまでは、様々な刺激によるプレッシャー、すなわち「オン」を与えて前進を促します。そして、前進を開始したら、その瞬間にプレッシャーの解除、すなわち「オフ」を与えることによって、子馬に人間の指示を理解してもらうのです。

プレッシャーの与え方 ― 前進しない時 ―

では、具体的に前進しない場合のプレッシャー。すなわち「オン」はどのように与えればよいのでしょうか？生後直後は、別のスタッフに後方から前進を促してもらいます（図6）。最初は、後方から臀部を押し続けなくてはなりませんが、前進するようになったら、押すことをやめる、すなわちプレッシャーを解除して、子馬自身に歩いてもらいます（図7）。最終的には、子馬自ら歩くようになり、もう1名のスタッフは、後ろから見守るだけになります。

また、1名で引くことができるようになっても、子馬が前進しないことは頻繁にあります。この場合、保持者は、様々な方法を用いて子馬に「オン」の合図を与えますが、パッティング（右手で臀部や肋部を軽く叩く方法）が効果的かつ容易な方法です（図8）。また、トゥーフィンガーで頭絡を保持している場合は、頭絡を介した合図も有効です。しかし、この場合、継続的にプレッシャーをかけてしまうリスクがあるため、可能な限りソフトに保持して、ピンポイントで「合図を与える」というイメージで用いると良いでしょう。なお、頭絡の各部位は、それぞれ合図を与える方向や意味づけが異なりますので、その使い分けを明確にする必要があります（図9）。

図6　後方からの「オン」で前進を促す

図7　子馬が前進したら「オフ」にする

図8　パッティングによる「オン」の合図
（右手で臀部や肋部を軽く叩く方法）

図９　頭絡の各部位に対する合図

また、上記以外にも、子馬が立ち止まった際には、無理にプレッシャーを与えずに、子馬を軸にした回転を用いて前進させることも可能です（図10）。

図10　子馬を回転させることで前進させる
（子馬が立ち止まった場合）

上記いずれの方法を用いた場合であっても、子馬が自身のバランスで歩いてくれたら、必ず、プレッシャーを解除して「オフ」の雰囲気をつくりましょう。

リードの装着

では、リード装着時期の目安は、いつでしょうか？明確な答えはありませんが、子馬の頚部が安定する２～３ヵ月齢になるものと思われます。ただし、リードは止め具がない１本のロープであり、鼻革の下部で折り返して使用します（図11）。この方法は、リードの頭絡への装着部位に「遊び」ができるため、頭絡への過剰なプレッシャーを防止することができます。また、子馬が突発的な動きをしても、頚へのダメージが最低限で済みます。さらに、たとえ放馬しても、リードが容易に外れることで、リードを肢で踏む、もしくは絡ませることによる転倒を防ぐことができます。

なお、リードの使用、不使用にかかわらず、子馬を力ずくで保持することは回避すべきです。前述したように、頚へのダメージが懸念されるとともに、頭絡への持続的なプレッシャーは、子馬の頭の中を混乱させる原因となり、理想とする「馬自身のバランスによる歩行」からかけ離れてしまうためです。「どうしても子馬を放したくない」という気持ちは理解できますが、その気持ちが強すぎるあまり、子馬が窮屈そうに歩いている場合も少なくありません。生後間もない子馬は、たとえ放れたとしても、必ず母馬について行きます。ですから、子馬が突発的な動きをした場合であっても、無理に保持しようとせずに、ルーズに持つ、もしくは放すことも一手かと思います。

図11　リードは止め具がない１本のロープ
（鼻革の下部で折り返して使用）

最後に

生まれたばかりの子馬は、成馬と異なり、人間の指示に従って歩くことはできません。しかし、ほぼ毎日実施する引き馬によって、人をリーダーと認め、人馬の信頼関係が構築されていくのです。人間の子供に対するしつけと同様、生まれた直後から、馬の性格に対する理想を描きながら日々接することが、ホースマンの役割であり、この仕事の醍醐味でもあるのではないでしょうか。